とある魔道師と幻想殺し

Taciturn fraud

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある魔道師と幻想殺し

【Ｎコード】
Ｎ３３４４Ｘ

【作者名】
Ｔａｃｉｔｕｒｎ　ｆｒａｕｄ

【あらすじ】
何も、こんな悲劇的な結末じゃなくても良いはずだ。そいつを食い止めるために、戦ったっていいはずだ。上条当麻の活躍で第三次世界大戦が終わり、平和な日常が始まっていた…しかしそこに上条当麻はいない
なぜなら、上条当麻は未来に行っていたから？上条当麻が目を覚ました場所はミッドチルダという魔術ではなく魔法が使われているところだった！？機動六課の訓練所に落ちた上条は事件に関わることになって…

幻想殺しと魔道師が交差する時、物語は始まる

プロローグ（前書き）

一応この作品が僕の処女作です。面白くないかもしれませんが読んでくれるとうれしいです！また、間違いやおかしな点があれば言ってくれると幸いです

プロローグ

何も、こんな悲劇的な結末じゃなくても良いはずだ。
そいつを食い止めるために、戦ったっていいはずだ。

この時、二つの影が最短距離で激突した。
右手に《幻想殺し》を持つ男、上条当麻と暴走した大天使、ミーシャ＝クロイツェフは
激突した。
《幻想殺し》を使いミーシャ＝クロイツェフを消したその瞬間！
彼、上条当麻の体を光り輝いた何かが包み込んだ。
……一方その頃、とある訓練所では…
「次の一撃で終わりにしましょう！！」
「いいよ、全力全開で返り討ちにしてあげる！」
青色の髪をした少女が呼びかけると、橙色の髪のツインテールの女性が答える
「「ディバイ～ン」」
この時、彼女達はまだ気づいていない。
上空で意識がないツンツン頭の男が落ちてきていることに…
「「バスター！！」」
桃色の光線と水色の光線が衝突しそうな時に、
間に入るように、ツンツン頭の男が落ちてくる…
「「えっ！？」」
「ぐはっ」
光線は見事に男に直撃した。もちろん意識はないので、そのまま男は、海に落ちた。
こんな時、彼ならこういうだろう「不幸だぁぁ！」…と
この時、それを見ていたメンバーがあわてて彼を助けに行ったのは別の話である…

上条当麻と魔道師が交差する時、物語は始まる…

出会い

上条は、体中にする痛みで目が覚めた
上条「…・・ここは？」
？「あっ、起きたのね！」
声のする方を見ると、髪が金色の女性がこっちを見ていた
上条「ここは何処ですか？」
？「ここはミッドチルダよ」
ミッドチルダ？聞いたことがない名前だ…
そんなことを考えていると、急にドアが開き
「シャマル、彼の目が覚めたって本当！？」と言いながら橙色の髪をした女性が入ってきた
あの髪が金色の女性は、シャマルっていうのか…
橙色の髪をした人がこっちにに来る
「体は大丈夫？」
上条「あぁ…大丈夫ですよ…慣れてますから……それよりえーっと…」
「あっ自己紹介がまだだったね、私、高町なのは！君は？」
上条「おれは、上条当麻っす、それより聞きたいことがあるんですけど…」
なのは「なに？」（上条当麻？どっかで聞いたような…）
俺が聞きたいことは一つしかない
上条「第三次世界大戦は？」
なのは「なに言ってるの？４年前に終わったじゃない？」
えっ４年前？
上条「それじゃあ学園都市は？」
なのは「君、大丈夫？それも４年前に壊滅したじゃない…」
何がなんなのか全くわからない…学園都市が壊滅？
高町が心配そうな目でこちらを見ている

上条（警戒されてしまうか？）
上条「な、な～んてな！冗談だよ！」
なのは「ならいいけど・・・」
上条「わざわざありがとうございました。それじゃあ「まって！」
ガシッ？」
上条「どうしたんでせうか？」
なのは「こっちの質問にも答えて…なんで空から落ちてきたの？」
上条「はい？上条さんがですか？」
なのは「うん、落ちて来たよ？」
上条「そんな訳ないでしょう、では上条さんはこれにて…痛ッ」ぐらっ
なのは「えっ！？」ぼふっ
？「彼が目を覚ましたって本ｔ！？…なのはが押し倒されて！…」
上条さんの不幸は健在です
？「なるほど…なのはが押し倒された訳ではないと言うことだね…」
なのは「何度もそう言ってるでしょフェイトちゃん！」
なのフェイ「「…で君は何処に行こうとしてるのかな？」」
上条「ギクゥ！？なっ何のことでしょうか？」
フェイト「さっきから一歩ずつドアに近づいて行ってるでしょう」
なのは「見てないと思ったら大間違いだよ！…傷だって治ってないのに」
上条「だってここに居たら迷惑がかかりそうなんで…そういう事で…！？」
なのは「バインドさせてもらったよ」
上条「これは魔術でせうか？」
フェイト「正確には魔法だけどね…」
ニヤァ上条「それを聞いて安心しました」バキンッ
なのは「バインドが」
フェイト「砕けた？」
上条「それでは、サヨナラぁ」ダッ

なのフェイ「……えっ！？」
なのは「ハッ追うよフェイトちゃん！」
フェイト「うっうん」
なのは「レイジングハート」
フェイト「バルディッシュ」
なのフェイ「「セ～トアァップ」」
シャマル「なにごとよ全く…」

その時、訓練所では……
「そう落ちこむなよスバル」
スバル「だってヴィータ副隊長！当てたんですよ私あのツンツン頭の人を全力で…」
ヴィータ「生きてるんだから良いだろ…なのはの全力もくらってな…」
上条「助けて～」
ヴィータ「…ピンピンしてるぞアイツ」
スバル「…ですね…って追っかけているの隊長達じゃないですか！」
なのは「ヴィータちゃん、スバルとティアナ」
フェイト「エリオとキャロ、シグナム」
「「「「はっはい！」」」」
なのフェイ「そいつを捕まえて！」
なのは「多少の攻撃はしても良いから」
一同「はい！」
上条「あぁ～不幸だぁぁ～」

避けるのは得意なんです

ヴィータ「行くぞアイゼン！死ねぇぇ！」ブンッ
上条「危なねぇっ！」
ヴィータ「チッ外したか…行けぇスバル、ティアナ！」
「「はいっ！！」」
ティアナ「シュートバレット！！」バンッ
ティアナ「今よスバル」
スバル「うん！！」
上条「挟み撃ちかよ！？よけにゃ死ぬわ！」
スバル「今だエリオ」
エリオ「わかってます！」
上条「今度は突っ込んできた！？ヤベェ」タッ
エリオ「飛び越えたなんて…」
キャロ「フリード！」ボッ
上条「これは避けれるぜ」
シグナム「紫電一閃！」
上条「それガチ技じゃねぇか！」
シグナム（もらった！）キュイーン
一同「「「「「！？」」」」」」
エリオ「技を消した！？」
上条「やったぜ！」
この時、彼は気づかなかった。
足元に空き缶があることを…
上条「えぇ～不幸だぁ」ドテン
なのは「覚悟は」
フェイト「できてるよね」
上条「ヒィィィ」
シグナム「ちょっと待て、提案が一つあるんだが…」

フェイト「なに？」
シグナム「一対一の模擬戦をしたらどうだろうか」
なのは「…そうだね、そうしようか」
上条「ハァ～不幸だ…じゃあ俺が勝ったら勝手にさせてくれよ？」
フェイト「良いよ、負けないから」
なのは「ただしこっちが勝ったらおとなしく医療室に戻ってね」
上条「わかってるよ」
フェイト「先に私がいくね、なのは」
なのは「頼んだよフェイトちゃん！」

上条当麻ＶＳフェイト（前書き）

戦闘シーンは得意じゃありませんっ！…という訳であまり期待しないでください

上条当麻ＶＳフェイト

模擬戦場
フェイト「最初から本気でいくよ」
上条「いいぜ、かかってこい」
フェイト「インパルスフォーム」
一同（あっあの人死んだ）
上条「お互いに１ヒット受けたら負けな」
フェイト「わかった」（速攻で終わらせて早く医務室に連れてってあげなきゃ）
なのは「模擬戦開始！」
フェイト「行くよ！！」フュン
上条「速い！」
フェイト（後ろがとれた！）「私の勝ちだぁ！」
上条「それは気が早いんじゃねーの？」ひょい
一同（あの状況で避けた！？）
フェイト「…なんであの状況で避けれるのに攻撃してこないの？」
上条「だってあんた手加減してるだろ？」
フェイト「…なんでわかったの？」
上条「だってその武器を縦にしてきただろ」
上条「本気でするならその武器で俺をブッ飛ばせたはずだったからな」
フェイト「！？……」（この人、あの一瞬でそこまで…）
上条「来るなら本気で来ないと、お前負けるぞ？」
フェイト「そう、みたいだね…」
上条（まぁかなりビビったんですけどね～）
フェイト「いくよ！」ダッ
ヴィータ「あいつかなり強いな」
シグナム「あぁ一度は手合せしたいものだな」

ティアナ「ど、どんだけ強いのよ」
スバル「最初の速度でも私達かわせないのにね…」
ティアナ「あの人、何をしている人なんだろうね」
スバル「後で聞いてみようよ」
ティアナ「そうね…フェイト隊長が勝てばの話だけど…」
もう少しで勝敗が決まる……

上条「やっぱり早いですね」
フェイト「全部の攻撃をかわしてる人がよく言うね」
上条「これじゃあ決着なんてつく訳ねえよ…」
フェイト「次の一撃でラストにするよ」
上条「わかった、次の一撃で終わりにしよう！」
フェイト「勝つのは私だ！！」ヒュン
フェイトが一瞬で上条の後ろまで行く
フェイト「もらった！」
上条「悪いがあんたよりも早い奴と戦った事があるんでね！！」
上条は完璧に読んでいた。
一同（あの人（アイツ）のかちだ！！）
そう、この勝負は上条がかつはずだった。…そのまま拳を出していれば
上条（あれ、この服装ってたぶん魔力でできてるよな？
　それを右手で触ったらアニェーゼのように…！？）
そんな事を思ってしまったが最後、上条は出していた拳を止めた。
その後、左手を出そうとしたが間に合うはずがない
上条の体がきれいに飛んで行った
フェイト「勝ったの？」
シグナム「いや、試合に勝って勝負に負けたという所だろう」
フェイト「やっぱり…っていうか怪我人相手に本気で攻撃しちゃったよ」タッ

シグナム「あれで怪我をしているのか…」
ヴィータ「味方にしておきてぇな」
シグナム「まったくだな」
エリオ「すごい…」
キャロ「うん、あの状態のフェイトさんに勝ちそうになるなんて…」
一同「「「「あの人と戦ってみたいな…」」」」

質問攻め

上条「ここは確か医務室だったような…」
シャマル「あっ目が覚めたのね！皆に連絡するからちょっと待ってね～」
シャマルさんが皆に連絡しに行ったようだ
上条「負けたのか…まっ、仕方がないか」
？「お前は強いらしいな」
上条「うわっ犬がしゃべった！？」
？「犬ではなくオオカミだ、それにザフィーラという名があるぞ上条当麻」
上条「そうか、それは悪かったなザフィーラ」
ザフィーラ「やけに物わかりがいいな」
上条「なんかもう慣れた」
ザフィーラ「そうか…」
ザフィーラとの会話が終わるとドアが開き9人程入ってくる
上条「どうしたんだ大勢でこんなところに…もう上条さんは逃げませんよ～」
ティアナ「あの、上条当麻さん」
上条「ん？」
スバル「私たちに稽古をつけてくれませんか？」
上条「ハァなんで俺なんかに？」
エリオ「フェイトさんとの模擬戦を見て思ったんです」
キャロ「この人強いなって」
上条「なんでオレ負けたじゃん」
フェイト「勝てるはずの所で攻撃を止めたからね」
上条「ギックゥ～！な、何のことか全くわかりませんなぁ」ダラダラはやて「シグナムから聞いたでぇ～あんたわざと負けたんやってなぁ」

上条「誰がわざと負けるか！？」
ヴィータ「ならなんでアッコで殴りきらなかったんだよ？」
上条「あれは、フェイトさんの事をおもってだなぁ…ハッ」
シグナム「何故テスタロッサを思って殴らないんだ？」
上条「えっと～そ、そう顔面を殴っちゃいけないかなぁって」
なのは「嘘は良いから正直に答えなさい！！」
上条「だぁ～明日だ、明日全部説明するから」
はやて「ホントやろうね…シャマル」
シャマル「わかってますよ、一歩も出しませんよ♪」
上条「」
なのは「じゃあ明日訓練所で全部説明してもらおうよ」
フェイト「そうしよう、今日はもう疲れたし」
上条「不幸だ…じゃあ交換条件で学園都市の事を情報として下さい」
なのは「わかったよ、第三次世界大戦についても調べておくよ」
上条「ありがとう、高町さん」
なのは「な・の・はって呼んで」
上条「じゃあ、ありがとうなのは」キリッ
なのは「ど、どういたしまして」／／／／
その夜
なのは「上条君の為に頑張ろう」／／／／
上条「疲れたな…寝よう」

翌日、訓練所
はやて「さぁて説明してもらおうか」
上条「その前に…なのは！」
なのは「ふぇ、な、なに？」
上条「資料を見せてくれないか？」
フェイト「いいんじゃない？なのは…まだ皆来てないし…」
なのは「そうだね、ハイこれ」
上条「ありがとう、逃げないから安心しろ」

上条は資料に目を通して絶望した
スバル「すみません、待たせちゃって」
上条「ハハッアハハハハッ」
なのは「か、上条君？」
上条「ありがとう、なのは凄くわかりやすかったよ」
はやて「…説明してもらおうか…」

幻想殺しの話、そして…（前書き）

更新が遅くなってしまってスミマセン！
…ネタが浮かばなかったので、オリキャラを出してみました！

幻想殺しの話、そして…

上条「そうだな、まず昨日殴らなかった理由からいくか」
上条「俺の右手には《幻想殺し》という力がついている」
一同「《幻想殺し》？」
上条「そう、この右手で触れれば異能の力なら全て消せるんだ」
フェイト「じゃあ、あの時上条さんが私を殴っていれば魔力でできている…」
上条「あの服は消える」
「つまり負けた上に素っ裸ってことだ」
ヴィータ「でも信じられねぇよ《幻想殺し》なんて」
上条「そういうだろうと思ったよ、だからなのは！」
なのは「なに？」
上条「俺に向けて一発魔法を出してくれ」
なのは「うん、いいよ」ポッ
上条「よく見ておけよ…」キュイーン
一同「本当に消した！？」
フェイト「上条君ありがとう」
上条「いや、大したことないさ…これが殴らなかった理由だ」
一同「なるほど」
はやて「…まだあるやろ、説明すること」
上条「ああ、それは俺が落ちてきた原因と俺のこれまで…かな」
一同「原因？」
上条「あくまで仮説だがな…」
ティアナ「原因ってなんですか？」
上条「実は俺さ今この時代にいちゃダメなんだよ」
一同「？？？」
上条「まずは第三次世界大戦について詳しく説明しようかな」

「第三次世界大戦はどういう風に聞いた？」
フェイト「確か学園都市とロシア側の宗教の対立にイギリスが割って入ったって感じだよ」
上条「表向きはそうなっているのか…」
エリオ「表向き？」
シグナム「裏があるみたいな言い方だな」
上条「みたい、じゃなくて裏があるんだ」
「あれは一人の男が世界を救いたくて起こした事なんだよ」
ヴィータ「どうして世界を救いたくて戦争を起こすんだよ！」
上条「ああ間違っている、だからそんな幻想は殺してやったのさ」
キャロ「じゃあ戦争を止めたのは上条さんなんですか？！」
上条「そんなスゴイ事はしてないしな」
「そもそも俺の右手が原因だったしな…」
なのは「どういう事？」
上条「どうやら俺の右手が力を手に入れるために必要だったらしい…」
？「それは良いことを聞かせてもらったな」
一同「「「「？！」」」」」
声のする方を見ると、ひとりの男性が空を飛んでいた…
ヴィータ「何者だテメエェ！」
？「私はゴルダーだ、覚えておけ…生きていればな」ニヤッ
フェイト「来るよ！」
フェイトがそういうと皆がバリアジャケットをまとう
ゴルダー「私が彼の右手だけだよ、だから？動くな〃」
ゴルダーがそういうと全員、一歩も動けなくなる
上条「これは…《黄金錬成》？！」
ゴルダー「ほぉ～わかる奴がいるとは驚きだな」
上条「なんでお前がこの術を…」
ゴルダー「錬金術について学んでいたらこうなったのさ」
上条は右手に全ての力を加え自分の体に触れる

すると高い音が鳴り、動けるようになる
ゴルダー「まだまだ勝負はこれからだよ…」

激突（前書き）

最近投稿のペースが遅れてる気がするので、気を付けていきたいと思います

激突

動けない人全員を触れるわけもなく、自然と一対一になる
上条「…お前の目的は何なんだ！？」
ゴルダー「俺はこの力を使い世界を我が物にする」
上条は思う
こいつはアイツと同じ間違いをしていやがる！
はやて「そんな事できるわけないやろ！アンタなんかに」
ゴルダー「？なんか〝だとぉ！」
ゴルダー「…決めたお前から殺す…」
上条はこの光景にデジャブを覚える、それを気づいた瞬間走り出す
ゴルダー「…？死ね〟」
そう言われた瞬間、体が揺らぎ前に向かって電池が切れたように倒れた
「「「「「「はやて（ちゃん）！！」」」」」」
上条「はやてぇぇぇぇぇぇ！！」
上条は全速力ではやての元に行き右手で抱きかかえる
すると微かに息をしている音がするので安心する
それと同時に怒りも覚えている
上条「アンタが何の躊躇もなく人を殺しても良いと思っているならまずは、そのふざけた幻想をぶち殺す！！」

それがなのは達が最初に見た上条当麻の本気の殺気だった
ゴルダー「？感電死〟」
ゴルダーがそういうと雷が上条の方へ向かっていく
上条は右手を前に出しその雷を消す
ゴルダー「なるほど魔術では消されてしまうか…」
上条（もうバレた！？）

ゴルダー「それなら…」
ゴルダー「？左手に銃、右手に剣″そして最後に？動くな″」
上条「しまっ―」
上条はさっきの全力疾走で先程までの力は出ない
そしてゴルダーは一歩ずつ確実にこちらに近づいてくる
スバル「上条さん逃げて！」
ゴルダー「右手は頂いていく！」サッ
音はない、ゴルダーが右手を振った瞬間、上条の右腕が肩口から切断された

激突（後書き）

能力を『黄金錬金』にしたのは、一番はじめに思い浮かんだからです。

…展開が速いので気をつけていきたいと思います！

竜王の顎

切られた感覚はなかった
キャロ「キャァー！」
キャロの叫び声が自分の意識を保たせる
ゴルダー「これで終わりだ」
ゴルダーが左手の撃とうとした瞬間…
上条のこめかみからブチリ、とスイッチの切り替わる音が聞こえた
上条「あはははははははははははははははははははははははは
はははははは―ッ！！」
上条が左手で銃を落とす、そして相手の腹に目掛けて渾身のけりを入れる
ゴルダーは後方3メートルのあたりまで吹き飛んだ
ゴルダーはそのことを『不快』に思った
ゴルダー（なぜだ、何故この状況で笑っていられる？）
『不快』は次第に『不安』に代わっていく
上条はゆっくりとゴルダーの方へ向かってくる
不安は大きくなっていく
上条「どうした？殺してみろよ」
「はやてにしたようにしてみろよ…」
ゴルダー「…右手に暗器銃、弾は一発で十分！」
ゴルダーは自分の右手が震えていることすらわからない
ゴルダー「く、来るなぁ―」バシュ
目に見えない速さの弾が上条のスレスレをとおっていく
ゴルダー（なぜだ！！何故当たらない？）
そして弾が当たらないことにより
しだいに『不安』は、大きな『恐怖』へと変わっていく。
ゴルダー（あいつはいったいなんなんだ？）
今まで考えもしなかった相手の正体を考え出す

上条「おい」
突然声を出されてゴルダーは体をビクリ、と震わす
上条「まさか、この程度で俺の《幻想殺し》を潰せるとか思ったんじゃねえだろうなア？」
右肩から先は切られてしまってないはずなのに、
もう気絶しても、おかしくないほどの血液が流れているのに…

上条は心底楽しそうに笑う

ゴルダー「なんなんだ！それはっ！？」
それ、ゴルダーの目線の先あるものは……
上条の右腕の断面から二メートルを超すほどの巨大に強大な、竜王の顎
それでも竜王の顎で頭から飲み込もうとすると……

動きが止まった

ゴルダーはすでに恐怖から気を失っていた
上条が自分の左手で竜王の顎を押さえていた
上条「お前は……出てくるな！！」
上条が左手で竜王の顎を潰すと切られたはずの右腕があった…
「後は頼んだ…」そう言うと上条は
電池の切れた人形のようにその場に倒れた
皆は呆然としていた
訳のわからないことが多すぎる…
フェイト「：ハッなのは！医務室に運ばなきゃ」
なのは「そ、そうだね！　皆運ぶのを手伝って～」
一同は、モヤモヤとした想いを胸に秘めながら
はやてと上条を二人を医務室へ運んだ

フォアード陣隊長会議（前書き）

遅くなってスミマセン！
よくわからない描写が入ってますが、後々必要になりますので頭の片隅に入れておいてください

フォアード陣隊長会議

上条を医務室に運んだ後、フォアード隊長陣は集まって今日の事について話し合っていた
フェイト「…それにしても、最後の？アレ〟は何なんだろう？」
？アレ〟すなわちゴルダーが上条の右腕を切断した時に出てきた禍々しい顎
その正体は上条自身にもわかっていない
なのは「あの顎はわからないけど、あの時の上条君は凄く怖かったよね…」
なのはの一言に頷く一同
ヴィータ「まぁ後でアイツに聞けば良いだろ…」
フェイト「…それよりも気になることがあるんだ」
シグナム「ゴルガーとやらが使った『黄金錬成』、か」
フェイト「はい…」
なのは「確かに私達の使うものとは違った雰囲気がしたね」
ヴィータ「ああ、言ったことが本当に起きるなんて今でも信じられねぇぜ」
なのは「ホントに動けなくなっちゃったもんね」
シグナム「…それに、あと少しで主はやてが死んでしまう所だった」
「「「「……」」」」
？死ね〟その一言で本当に人が死んでしまう所だった
しかも自分たちにとって大切な人が
ヴィータ「…あいつには感謝しねぇとな」
他の3人も口には出さないが思っている事は同じである
なのは「やっぱり上条君は良い人だねっ！」ニコッ
ヴィータ「だなっ！」ニッ
あぁ、どうしてこの二人はこうも単純なんだろう…と思わざるを得なかったフェイトとシグナムだった

真っ黒な暗闇の中、一人の青年上条当麻は歩いていた
前後左右、上も下もわからない空間の中をひたすら歩いていた
そんな気味の悪い空間の最深部、上条はたった一枚の扉を見つけた
扉の周りには決して綺麗とは言えない光が帯びていた
恐る恐る扉の方へ向かっていく
周りが見えない上条は後ろの地面が無くなり奈落の底に変化している事に気づいていない
上条が扉にそっと触れる
キュイーン
反応するはずのない右手が何故か反応した
ゴゴゴゴゴゴッ
突如開かれた扉により、上条は奈落の底へと落ちて行った

フォアード陣隊長会議（後書き）

スミマセン、これから期末テストがあるのでテスト勉強の為少し更新が遅れます

案内（前書き）

やっと終わった、魔の期末テスト！…という訳でこれから通常通り頑張っていきます！！

案内

上条が目を覚ますと、もう見慣れた天井があった
上条「医務室か……というか布団がやけに重いような…ブッ？！」
あたりを見回すとゴルダーとの戦いを見ていた全員がベッドを囲んで寝ていた
ティアナ「ん…目が覚めちゃいましたか」
上条「あぁ起こしたかワリィ」
ティアナ「いえ、大丈夫です。上条さんの方こそ大丈夫ですか？」
上条「あぁ大したことないぞ！…っていうか上条さんはやめてくれないか？」
ティアナ「じゃあどう呼べば…」
上条「呼び捨てか、当麻で良いよ」
ティアナ「えぇ！悪いですよソレは」
上条「ん～じゃあ“上条”って呼び捨てでいいよ」
「後、敬語は禁止ね」
ティアナ「…わかりまs…わかったわ。上条」／／／
はやて「どうしたんや、騒がしいでぇ」
騒いでいたせいか次に、はやてが起きたようだ
上条「おはよう、はやて」キリッ
はやて「お、おはよう」／／／
上条「ほら皆おきろぉ」ゆさゆさ
なのは「ふぇ、あっおはよう」
上条「ああ、おはよう」
なのは「…て、もうすぐ訓練の時間じゃない！！皆いくよ！！」
一同「「「「「「は、はい」」」」」」
なのは達は、凄く慌てた様子で訓練所に向かっていった
上条「ふぅ皆行ったか…」
はやて「まだ、おるよ！」

上条「うおっビックリした！！どうしたんだ一人だけ残って」
はやて「言いたいことがあってな」
上条「言いたいこと？」
はやて「うん、あのな　私を助けてくれてありがとう！」
上条「上条さんは人として当たり前のことをしただけですよ～」
はやて「でも、ありがとな…なんかお礼させてくれへん？」
上条「上条さんは、お礼目的でした訳じゃないんですよ～」
はやて「うちがしたいんや…何がいい？今日一日あいとるでぇ～」
上条「じゃあココを案内してもらおうかな」
はやて「そんなんでエエんか？」
上条「ああ頼むよ…」
別にお礼などしてもらはなくても良いのだが、それでははやてが満足しないので
しぶしぶ頼むことにした
はやて「じゃあ行こうか？」
上条「オウ！ついていきますよ姫」
はやて「それじゃあ、探検へレッツゴーや！！」

はやて「ここが食堂やで」
上条「へぇ～ずいぶん広いんだな！」
？「はやてちゃ～ん」
声のした方を向くと、小さい人形のような人がフワフワと飛んできていた
上条「なんかちっこいのが飛んできたでせうよ？」
？「ちっこいとは失礼するです！私はリイン・フォース？です！
上条当麻さん」
上条「？なんで俺の名前を…？」
リイン「それは昨日はやてちゃんがずっと―」
はやて「わぁ～！？言ったらあかんよ！」
上条「はやてがどうかしたのか？」

はやて「な、なんもあらへんよ！！」
上条「そうか…困ったことがあったら相談しろよ？力になるから」
はやて「了解やっ！！」
リイン「それじゃあ私は仕事があるんで…さらばです」
上条「じゃあな」

はやて「ここは知っての通り、訓練所や」
上条「ゲッ俺の血が床についてる…」
床にはゴルガーとの戦いで散ってしまった血がこびりついていた
なのは「はやてちゃんに上条君！どうしたの？」
なのはが上条たちに気付いたのか、小走りで近づいてきた
上条「俺が頼んでココを案内してもらってるんだ」
なのは「そうなんだ…」（私に言えば案内してあげたのに…）
なのはが悶々としている事を知らないで、上条は他のメンバーと騒いでいる
上条「…それより訓練はしなくても良いのか？」
そういえば！、と思いそれぞれが、なのはの方を見る
なのは「…それじゃあ訓練を始めようか……」
上条（あれ？何かなのはキレてないか？）
自分自身のせいだとは思っていない上条は、己の不幸センサーがビンビンな事に恐怖していた

いつも通りの不幸（前書き）

書き方を変えてみたら？という感想が来ていたので、思い切って変えてみました！思ったよりも難しいですね…
どちらが良かったか、感想よろしくお願いします！！

いつも通りの不幸

「それじゃあ訓練を始めようか…」と、額に青筋を立てているなのはが言った
ちなみに、今彼女は女性がしてはならないだろうと思われる顔をしている
「「「「「「……」」」」」」
フォワード陣は恐怖で返事さえもできないようだ
「…あれ、返事は？」
その一言でフォワード陣がビクゥ、とする
「「「「は、ハイっ」」」」
今日は皆、大変そうだなぁ～とか呑気なことを思っている上条だが彼の不幸センサーが不発に終わるなど
「……では今日はヴィータ副隊長とシグナム副隊長のコンビ対いつものメンバー＋上条君でしてもらいます。１ヒットでもしたらその人は負けね」

あるはずなかったのだ！

「…えっ！何でおれが？しかもオレ怪我人なんですけど！？」
意味が分からないと言った様子で、なのはに言い返す
「何か文句でも…？」なのはが上条に向かってギラッ、と視線を向ける
「イエ、ナンデモゴザイマセン！」
上条の意見が通る筈もなく、撃沈した
「で、でも俺、右手で触れないんだけど…」
それって不利だろ？と少し困ったふうに言う
そこで、はやてが一言ニヤついたふうに言う
「ええやん触れば？脱がせ、脱がせ！！」

「それはダメだろ！」
「軍手ならあるよ～」
……結局なのはが見つけた軍手で解決してしまった
「なぁ上条君？その軍手貸してくれへん？」と、はやてが言ってきたので訓練が始まるまで貸すことにした

模擬戦開始！（前書き）

この書き方でこれからも頑張っていきたいと思います
感想もよろしくお願いします！！

模擬戦開始！

作戦会議を始めた中で上条はスバルとティアナに作戦の内容を話した
「ヨシッ作戦は――――――――で行くぞ！」
「「えっ、えぇ～！？」」
「やってみようぜ！」
上条の作戦を聞き
「面白そうだね、その作戦！！」と若干興奮気味のスバル
そんなスバルの様子を見て
「とりあえずやってみましょうか…」と呆れた風に言うティアナ

「そろそろ始めてもいいかなぁ～？」
なのはが、こちらの様子をうかがうように聞いてきた
「あぁ良いぜ！」
「それじゃあ開始！」
開始の合図を聞き、上条がゆっくりとシグナムの方へ行く
「前線に出てきてやったぜ」
「それはありがたいな…」
バトルマニアのシグナムからすればフェイトに勝ちそうになった相手をするのが嬉しいのだろう
よく見ると顔が笑っている
「手加減なしでいいぜ」
「最初からそのつもりだ！」
上条の発言により二人の戦いが始まった
「あぶねぇ！」
怪我のせいで、ギリギリで躱すことしかできないが確実に防御をしている上条
そして、その様子を見てシグナムは上条が怪我人だということを忘れ攻撃している

だが、その様子を見て不敵な笑みを浮かべる人物がこう言った

「脱がせ！脱がせ！」

……これから降りかかる不幸を上条はまだ知らない

謎の作戦

上条とシグナムが戦っている時スバルとヴィータもお互い向かい合っていた
「…で私には二人か…」
「当麻さんの作戦ですから！」
自信があるのか、胸を張って言うスバル
「ずいぶん甘く見られたな私も…」
「小っちゃいからじゃないですか？」
バカにするような口調でヴィータを挑発するスバル

プツンッ
その時、何かが切れた音がした
「…スバル、お前は言ってはならないことを口にしたな」
「ヤバッつい口が滑って」
この期に及んで挑発を続けるスバル
「ワタシ、オマエユルサナイ！」
「何故にカタコト～？」
スバルの挑発による模擬戦という名の追いかけっこが始まった

その様子を遠くから眺めているライトニング部隊は…
「キレましたねヴィータ副隊長…」
「背の事は禁句だからね……」
だから絶対に行っちゃダメだよ、と困ったような顔で言うフェイト
「？それよりティアナさんの様子がおかしくないですか？」
ティアナの行動に疑問を持ったキャロがその場にいるみんなに聞く
「私もそれがきになっとったんや…」
「まさかスバルを巻き込んでヴィータちゃんに魔力砲を撃つつもりじゃあ…！？」

「でも当麻の作戦なんだよね？」
「どういうつもり何やろうな？」
この時だけ隊長陣が全員、首を傾げるというレアな姿が見れた

模擬戦決着！！（前書き）

今回はいつもより少し長めに書いてみました

模擬戦決着！！

そろそろ模擬戦も終了しようとしていた

「今だ、隙あり！」

上条はシグナムに向けて拳を繰り出す

「甘い！」

上条の拳をシグナムはレヴァンティンで受け止める

この勝負もらった！！、とシグナムは思った

このとき上条の体は、がら空きで防御なんてロクにできない状況だ。

しかし…

その時上条は不敵に笑った

「かかった！今だティアナ！！」

そう言われシグナムは先程、ティアナがいた場所を見る

「……」

ティアナはちゃんと最初にいた場所にいる

バシュン！！

その瞬間シグナムの背中に魔力弾が当たる

「！？」

「な、どういう事だ！？」

スバルの相手をしていたヴィータが驚いた様子でシグナムの方を見る

だがヴィータの体を水色のバインドでスバルが拘束する

「もらったぁ！」

すでに上条はヴィータの方へ向かっていた

「ヤバ――――」

…なぜ気が付かなかったのだろう

上条はこの時気が付かなかった…自分の軍手に穴が開いていて中指

が出ていることに……
自分の軍手が腕を早く動かすだけで穴が開くほど薄く削られていることに
「勝った〈バキンッ〉ゼ…？――――ッ！？」
上条の視界に入ったのは下着姿のヴィータの姿だった
「ｆｓ０．ｓｈ！？きゃ、キャア――――――――――！！！」
「えっなんで？…って軍手に穴が開いてる！？」
「「「「「か～み～じょう～～！！！」」」」」
上条が振り返ると模擬戦を見ていたはずの皆が真後ろまで来ていた
……軽くホラーである
「え～っと、私が悪いんでせうか？」
「「「「「もちろんっ！！」」」」」
「すいませんでした！土下座するから許してください！？」
もはや上条の辞書にプライドという言葉はない
「「「「「Ｉ☆ＹＡ☆ＤＡ！！」」」」」
「だぁぁぁＨＵ☆ＫＯ☆Ｕ☆ＤＡ！！」
上条当麻は走る、自分の命を悪魔から守るために…
「「「「「待ちなさい！！」」」」」

その様子を見て不敵に笑う一人の女性
「……私が削っておいたで！」
「は～や～て～」
「ヴィ、ヴィータ！こ、これはやな、その――」
「はやての仕業か～！？」
「逃げるが勝ち～♪」
「待ちやがれ！」
「待てと言われて待つバカはおらんよ～」

「…で何故か軍手が削られていたから、自分のせいではないと？」
捕まった上条は皆に囲まれるようにして正座をしていた

「そこまでは言ってないけど…罪が軽くなれば良いな、とか思ったり…」
「にゃはは〜〜……なりません！」
「ですよねぇぇ！ふこうだぁぁぁぁぁ」
「それじゃあ覚悟は良い？」
フェイトが上条に聞いてきた
「良くないと言ったら？」
「「「「「「「「「「コロス」」」」」」」」」」
「やっぱり？」
「「「「「「「「「「うん♪」」」」」」」」」」
「それじゃあエクセリオォォンバァスタァァー！」
「プラズマ…ランサァー！」
「紫電一閃！」
「シュートバレット！」
「シューティング・レイ！」
「ディバイィィン…バァスタァー！」
「ちょっ、それは死ぬ！？」
「死ねば？」
「それは酷ガブレハドブゥス！！」
それぞれの必殺技が上条に決まる
流石、必ず殺す技である
「…やりすぎたかな？…上条君？生きてる〜？」
「」
返事がない…ただの屍のようだ……
「た、大変だ！！調子に乗ってやりすぎた！？」
フェイトが慌てたようになのは達に告げる
ちょうど今、シャマルは外出中だから医務室は使えないし…
「？どうしたの、フェイトちゃん？」
「上条君をどうしようかと思って……」
「う〜ん…私たちの部屋で良いんじゃないかな？」

「そうだね、時間も結構ないし…ちょっと寝かせてくるよ」
「わかった～右手には気を付けてね！」
「わかってる」
そういうとフェイトは部屋の方へ向かっていった
フェイトが見えなくなると、なのはは先程の模擬戦の事を思い出していた
（まさかヴィータちゃんにスバルだけで戦わせるなんてね…）
皆が？上条がシグナムと戦うから、必然的に二人はヴィータと戦う〃と誰もが思っていた
だが、そんな幻想（常識）を彼は殺した
戦いなれている彼を見て、彼女は思う
（上条君、君はいったい何者なの？）
今、彼女の問いに答える者はいない…

それと別談だが、その一部始終を見ていた少年はその日は女性を見る度に震えたらしい

自称「メカニックデザイナー」現る！（前書き）

前回よりも更に長めです

自称「メカニックデザイナー」現る！

「ここは？」
上条が目を覚ますと、見覚えのない天井が広がっていた
（誰かの部屋かな？）
「まぁ訓練所に行ってみるか…」
さっきまでいた場所に戻った方がいいだろうと思い訓練所の方へ行こうとしたが……
「……盛大に迷ったぞ、この野郎！？」
当たり前だ、まだ案内してもらってないのだから
「あの～どうかしたんですか？」
「ちょっと迷ってしまいまして…、あなたは？」
「訓練所の方へ行く途中ですけど…」
「ちょうどよかった！俺も行こうと思ってたら迷ってしまって…」
「では一緒の行きましょうか」
「ありがとうございます！！…ところであなたは？」
「あっ自己紹介が遅れましたね！
私は機動六課ロングアーチ、シャリオ・フィニーノ一等陸士です！
あなたは？」
「俺は上条当麻！よろしくなフィニーノ！！」
「あなたが噂の空から落ちてきた系の方ですね！？あとシャリオで良いですよ」
「なんだよソレ…あと俺に敬語は良いからなシャリオ」
「わかったわ…上条さん」
「それじゃあ行くかシャリオ」
「そうだね！」

「あっシャリオさんと上条君が来たよ　！」
「上条君もう大丈夫なの？」

攻撃してしまって一番後悔しているであろうフェイトが聞いてきた
「ああ、こんな事しょっちゅうある上条さんは慣れたんですよ～」
「しょっちゅう人の服を脱がしよんか！？」
「ちげーよ！！理不尽な暴力にだよっ！？」
「それも、どうかともうけどね…」
「ところでシャリオと当麻は一緒に来たん？」
「なんかよくわからない部屋に居たからさ訓練所に戻ろうとしたら迷ったんだよ」
「私も訓練所に行こうとしたら大きな声が聞こえたから向かってみたら」
「シャリオと出会ったんだよ」
「シャリオは何しに来たの？」
訓練が一息ついたようで、なのはが聞いてきた
「ハッ忘れるところでした！」
いやいや忘れたらいけねぇだろ、と思ったが口に出さないのが紳士・上条である
「実は上条さんのデバイスを作るためにここに来たんです！」
「「「「「「えっ」」」」」」
「？」
上条はデバイスをよく知らないので首をかしげている
「な、なあ」
「なに？」
「？デバイス〟って何だ？」
「「「「「「えぇぇ！？」」」」」」
上条は皆の驚きの声にビビる
他の皆は上条がデバイスについて知らないことについて驚く
「どうしたんでせうか？」
「本当にデバイスを知らないの？」
「わからないから聞いてるんでせうよ？」
「ティアナ当麻に説明してあげて…」

「デバイス、ミッドチルダ式ではインテリジェントデバイス
　主の性質によって自らの調整を行い、
さらに人工知能を持っているので会話・質疑応答ができます」
「まぁ、そんな感じかな…」
ティアナが知識を披露できたことに胸を張っているが皆は反応しない
「それは何の動力で動いているんだ？」
「魔力で動いているよ」
また魔力か…、と顎に手を当てて考えて
「そっか…じゃあ俺はいらねぇや」
「「「「「えっ！？」」」」」
「どうして？」
「だって魔力で動いていて人工知能があるんだろ？
それを何かの間違いで核を触ってしまったら
俺はそのデバイスを殺してしまうことになるからな…
いくら人工知能でもソレをしてしまいたくないんだ……」
フェイトの質問に少し真剣な顔で答える上条
「で、でも復元できますよ！？」
「それでもだ…いうなら殺して生き返らしたって感じだから気が進まないんだ……」
「：なら仕方ないね」
「そうだね」
なのはとフェイトが賛同する
「悪いな、俺のためなのに」
「大丈夫や、何ともあらへんよ」
「それじゃあデータだけ取らせてください」
「データ？」
「はい、《幻想殺し》についてのデータが欲しいんです！」
「まぁ良いけど…痛いのはカンベンな」
「大丈夫、どの程度の魔法が消えるか試すだけだから」
「それって強力なのもするってことだろ！不幸だ…」

「ガンバレ当麻」
「すぐに終わるんで、ここでココでしましょう！」
「良いけど…誰の魔法を受ければいいんだ？」
「それはモチロンなのはさんにですよ！！」
「……死ぬよね？」
「非殺傷設定だから大丈夫ですよ…たぶん」
「たぶん！？今たぶんって言ったよコイツ！」
「あぁ～もう！それでは始めてください！」
「できるだけ手を抜くから頑張って！」
「なのはさん…今日シャマルさんいませんよね？」
皆が離れた後でシャリオがなのはに近づいてきた
「？そうだけど…それが？」
「つまりココで気絶させたら、上条さんの様子を見るという口実で
一緒に寝れますよ！」
実はこの女、なのはが上条に惚れていることを見抜いていた
「！？」

「できるだけ弱いので頼むな～」
「ゴメン上条君、本気で行くね…」
「何故に！？」
「全力全快ッスターライト・・・」
訓練をした後の訓練所…つまり魔力は充満している
（終わったな俺…最後に一つだけ『不幸だぁぁぁあああああ！！！』
）
「ブレイカー！！」
「どんだけバカデカイんだよぉぉぉ」

上条当麻はこの日三度目の『死』をむかえる…

「……ってなるかと思ったわ！」
上条は時間は掛かったものの見事にスターライトブレイカーを消した
「うそっ！あれすら消しちゃうなんて」
「いくらリミットをかけていたからって流石に自信をなくすよ…」
「リミット？」
「隊長、副隊長はリミットがかけてあるんです」
「あれで本気じゃないのかよ…」
「それでも破られた事なかったのに…って上条君右手どうしたの！？」
よく見ると上条の右手から血がポタポタと垂れていた
「ああ、デカすぎるのは右手の消す速度が間に合わないんだよ」
「上条君ごめんね？」
「気にするなよ、こんぐらい大したことないから」
「大したことなくはないよ…」
呆れた風にフェイトが言う
「死にはしないだろ…」
「なんで基準が死ぬか、死なないか、なんですか？」
特別救助隊を志望しているスバルからすれば今の発言は聞きづてならないらしい
「ん～そういう場面が多かったからな…」
「今度その場面とやらを聞かせてもらうからね…」

「フェイト、そんな事聞いても何も面白くないぞ？」
「それでもだよ」
「気が向いたらな」
「ところでその怪我どうするん？」
「包帯か何かするさ」
「それならうちの部屋にあるで～」
「マジか！ありがとな、はやて」
「どういたしましてや、じゃあ行こうか」
「ああ」

キャロとなんとか話せるようになったエリオは…
「そういえば結局僕たちはシグナム副隊長には勝てなかったね」
「ごめんね、私のサポートが下手だから…」
「練習して頑張ろう！」
「うん！！」
と、このようにしてチームワークを深めていた
「…そういえば上条君と寝れなかったなぁ～」
「上条君と寝るつもりだったの？」
「うん、シャリオが上条君を気絶させたら一緒に寝れるって」
「シャリオ？どういう事なのかな？？」ゴゴゴ
「いや～どのぐらい消せるのか気になったので…」
「ハァ…後で当麻に謝っといてね」
一応微笑んではいるが先に行っておこう
凄く……恐いです
「りょ、了解しましたぁぁ」
「今日は、はやての方で寝そうだね」
お話したかったのにな、とフェイトは空を眺めながら、そうつぶやいた

一方その頃
「へぇ～結構きれいなんだな」
「上条君の部屋じゃないんだから当たり前やろ」
「なっ上条さんの部屋は全然汚れてませんの事よ！？」
「どうせベッドの下にでもエッチな本があるんやろ？」
「ベッドの下なんてバレるから置いてません！！」
「バレるって誰にばれるん？」（持っとることは否定せんのやね）
「……」
「どうしたん？」
急に黙ってしまった上条の様子を窺うように、はやてが覗き込む
「居候の事を思い出して…ちょっと…な」
「心配なんか？」
「いや、今のアイツには頼れる奴がたくさんいるから大丈夫だろ…」
「…じゃあ何で泣いとるん？」
上条は自分の頬を触ると濡れていた
「泣いてなんかねぇよ」
「そんな顔で言われても説得力無いで」
「……悪いなはやて…つい思い出してしまってな」
「気にせんでええよ、ここにはうちしかおらんから」
「……ありがとな」
「別にええよ、そういえば上条君は何処で寝るん？」
「食堂とか、かな？」
「それはアカン！…ここで寝たらどうや？」
「はいぃ？それは色々まずいんじゃないんでしょうか？」
「なにがまずいん？上条君まさか襲う気じゃあ！」
「誰が襲うか！！だ・れ・が！」
「そこまで言わんでも…」
「上条さんは紳士なんですぅ」
（かかった！）
はやては勝利を確信した

「紳士なら大丈夫やね」
「ハッ、しまったぁぁああ！！」
「一緒に寝ような、上条君♪」
「クッソ――――――――ッ」
見事にハメられた上条だった

「ここが機動六課本部か…」　上条が嘆いていたとき、不敵に笑う一人の男がいた…

マジギレ（前書き）

風邪をひいてしまって、２日間更新ができなかったｏｒｚなので、これから頑張っていきたいと思います

マジギレ

その夜、上条は不意に目が覚めた
（おかしい）
結局一緒に寝ることを阻止した上条だったが、同じ部屋にいたはずのはやてがいない
（ちょっと見てまわるか…）

その頃キャロは…
（エリオ君に迷惑はかけられないッ！）
一人でフリードも連れずに自主練していた
一つの陰が近寄るのも気が付かずに…

「クソッ何で皆いねぇんだよ！？」
明らかにおかしい、通路を通っていても誰ともすれ違わないのだ
「誰かの部屋に入ってm〈キャァァ〉ッツ訓練所の方か！」
数々の幻想を打ち消してきた右手
だが、そのせいで消えてしまったものもある……幸運だ
自らの右手の能力で他人まで不幸にしてしまう
上条は、そんな自分が嫌いだった
（不幸なのは俺だけで十分だ！）
だからこそ上条は走る
自分のせいで不幸になってしまう大切な人を守るために…

「もっと強くならないと！」
「素晴らしい心がけだな」
「！？だれっ！」

不意にした声の方へキャロは顔を向けると、一人の男が立っていた
「そんな殺気立てるなよ…」
「いきなり出てくるような人は信用できませんから」
「チっメンドくせーな、もう良いや」
男はキャロの方へ手のひらを向ける
「？いったい何を？」
突然、手のひらから出た緑色の光がキャロを襲う
「キャアァ」
「こいつも連れて行くか…」
「行くぞ…」
「…はい」
男が声をかけるとキャロはおぼつかない足取りで男についてゆく

（どうしたんだ？アイツ）
上条は違和感を覚えていた
キャロの様子がおかしい。
足取りがおかしいし、そもそも目の焦点が合っていない
なにより先程聞いた悲鳴はキャロのものだった
男の様子を探りながら、ついていく
（なんだよコレ！）
そこで上条が見た光景は信じられないものだった
なのはが、フェイトが、はやてが、フォアードのメンバーが一つの柱につながれていた

（なんで？なんで体が動かないの？）
意識はあった、だが体がいう事を聞かないのだ
（やめて、私たちをどうするつもりなの？）
「ククッ、自分たちをどうするか分からないって感じかな？」
男がキャロに向かって歪んだ笑顔を向ける

「決まってる…売るんだよ、お前たちをッ！！」
「お前たちは顔が良いからな、５０００万ぐらいは軽くいくだろ」
「……まぁ、味見ぐらいはいいよな？」
キャロは自分が何をされるのか判断した
（こんな奴にッ……誰か、助けて！！）
…こんな時、あの右手を持つ青年が
男がキャロを柱につなごうとした瞬間、

男の体が吹き飛んだ

この絶望（幻想）を壊しに来ないはずはない
「何しやがるテメェ！？」
吹っ飛ばされた男が上条の方を見て言う
「？何しやがる″だと？それはこっちのセリフだ！」
「テメェこそ俺の大切な人達に何しやがるんだ！！」
「うぜぇ！これでも食らってろッ！」
キャロを襲ったものと同じ緑色の光が上条に向かって放たれる
「邪魔だ！」キュイーン
「！？」
男は何が起こったのか理解できなかった
自分の放ったものが一瞬にして消えたからだ
男がパニックになっている間に上条は間合いを詰める
上条の強烈な一撃がみぞおちに入り呼吸ができなくなる
その間にも上条は間合いを詰める
「どうしてテメェはこんな事をした！？」
「ただの趣味だよ、心は安定してるのに体はいう事聞かない
それが顔に表れているのがたまらないんだよ！
しかも金はじゃんじゃん手に入る！！最高だねぇ！！！！」
男は気味の悪い笑みを見せながら上条に言う

ブチッ

上条は今の一言で完全にキレた
「…構わねえよな」
「ハァ？」
「もしココで死にかけても、かまわねぇかって聞いてるんだよ！」
上条は怒っていた
自分の趣味で他人を不幸にする奴が、
そしてこの事態に気が付くことができなかった自分にひたすら怒っていた

「ガハッ」
上条が男の腹を思いっきり殴りつける
肺の中の空気が全て押し出される
だが上条はそんな事を気にもせず殴り続ける
顔面に拳が入るとボキッ、と鼻が折れる音がした
（逃げなきゃ殺される！　逃げなきゃ殺される！　逃げなきゃ殺される！　逃げなきゃ殺される！　逃げなきゃ殺される！　逃げなきゃ殺される！　逃げなきゃ殺される！）
男の心をその感情だけが支配する
「ゆ、許してくれ！」
「？許してくれ〟だと？ふざけんじゃねェッ！！」
「テメェは考えたことがあるのか！？自分のせいで他人を不幸にしてしまうことが！」
「世界には、したくなくても他人を不幸にしてしまう奴がいるんだッ！」

肺の中の空気が出され、鼻血のせいで呼吸もまともにできない
腹に一撃、更なる拳を入れる
「グガッ」
胃の中のものが強制的に出される
呼吸のせいでまともに動けない男の顔面をつかみ大木に頭を打ち付ける
男は完全に気絶したが上条はそんな事知ったことではない
倒れた男の肩を蹴る
肩が外れた感覚がしたが上条はそれでも止まらない
男の顔面を蹴ろうとしたその時
「それ以上したら死んじゃうわ！」
外出中だった金の髪をした魔導師に止められた

家出

「流石にコレはやり過ぎよ…」
「当事者が言うのも何だけどヒドイっすね…」
「私が来なかったら大惨事よ」
「まぁ結果オーライって事で」
「ハァ~ 全くあなたって人は…」
「じゃあ皆の様子を見てきますね～」
呆れてるシャマルをスルーして、上条はフォワード陣の方へ向かっていった
「普段優しい人が起こると怖いってこういう事ね…」
シャマルのつぶやきは闇の中に消えた

「皆さん大丈夫ですか～っと」
上条が行くと皆ぐっすり寝ていた
「こんなとこで寝たら風邪ひくぜ」
そう言いながら一人ずつ起こしていく
「ん～当麻か？」
「おはようはやて…と言ってもまだ夜だけどな」
「うちは、どうしてこんなトコで寝てんやろ？」
「覚えてないのか？お前は――――いや、やっぱ良いや…」
（わざわざ思い出さす事もないだろ…）
「えぇ！なんやソレ、めっちゃ気になるやん！？」
「思い出せないってことは大したことじゃないんだろ？」
「それもそうやね…」
「…それじゃあ俺は部屋に戻るからフェイトたちを頼む」
そう言って上条は部屋に戻っていった
俺が今回の事件（不幸）を引き寄せたのか…、と上条は闇に呟く
（……そろそろ此処を出ないとな…）

次の日の朝
「はやてはまだ寝てるな…」
上条はまだ寝ているはやてを起こさないように部屋から出ていく
たった一枚の手紙を置いて…
その手紙の内容は以下のような文だった

とりあえず世話になったな、ありがとう
やっぱり俺がいると周りの人まで不幸になるみたいだ
だから俺はココを出ていくよ
俺のことは忘れろ
じゃあな！

上条当麻

「はぁ～上条さんの不幸は健在ですよ～」
上条は出口に行くまでに空き缶を踏み5回こけた
その後も空き缶に注意していたら足を溝にハメるなどいつも通りの不幸だった
上条はそんなこんなで出口についた
「…これでココともおさらばか…」
「誰がおさらばするの？」
「そんなの決まってるだろ、もちろん――！？」
振り返ると真剣な表情をした、なのはとフェイトがいた
「もちろん…誰？」

「あれ～何で二人ともこんな所にいるんでせうか？」
「二人じゃないよ」
「へ？――――――ッ！」
上条の視線の先には鬼のような顔のはやてがいた
「はやて！何でここに居るんだ！？」
「？何で〝ってソレはこっちのセリフや！！なんやこの手紙の内容は？」
はやての手には一枚の手紙が握られていた
「何や？出ていく〟って？俺の事は忘れろ〟って意味わからんで！！」
「…意味なんて言葉通りだろ」
「そうやない！どうして出ていくんかって聞いとるんよ！」
「……決まってるだろ嫌いだからだよ、ここの全てが……」
「えっ…」
「俺はここに居る人の事なんかどうでもいいからな」
「嘘だね」
「！？」
フェイトがその発言を真っ先に否定する
「…どうしてそう思うんだよ？」
「上条君は言ったよね？」
「何を…」
「『俺の大切な人たちに何しやがる』って」
「ッ！フェイト、お前あの時…そんなの嘘に決まってるだろ！」
「じゃあ何であんなに怒ってくれたの？」
「あれがいつもの俺の戦い方だよ」
「じゃあ私たちと戦ってよ！あのやり方で」
「ッそんなのできる訳ないだろ！」
「何で？いつもの戦い方なんでしょ？」
「フェイトちゃん落ち着いて！」
「だって上条君が、上条君が…」

「フェイトちゃん、私わかったよ」
「わかったって何を？」
「上条君が出ていく理由だよ」
「「「！？」」」
「どういう事や、なのはちゃん？」
「手紙にも書いてあったことだけどは自分のせいで今回の事が起こったと思ったんじゃないかな？」
「！…ハァ～ああそうだよ、だから俺は出ていく」
「待って！どうして上条君のせいになるの？」
「なぁ俺の右腕は便利なものだと思うか？」
上条は自らの右手を見つめながら、なのは達に問いかける
「便利やろ、どうしてそんなこと？」
「この右手は消してほしくないものまで消していく…」
「幸運かな？」
「よくわかったな、なのは」
「上条君がよく言うからね…」
「で、でも関係ないよ」
フェイトが、そう言ってくるが…
「…じゃあ聞くが俺が来るまでに二回も敵の侵入を許した事あるか？」
「「「ッ！」」」
「ないだろ？」
上条はソレを否定する
「俺は自分の不幸のせいで他人まで不幸になるなんて嫌だからな」
「…誰も不幸になんてなってないよ！」
「そ、そうや！」
「…そうか、でもお前は一回死んでんだぞ？はやて」
「でも上条君が助けてくれたんや」
「・・・」
「それに私たちの事も救ってくれたよね？」

「…どうして俺を行かせようとさせない？」
「だって私達友達だから！」
「…もしココを抜けようとしたら？」
「私たちが」
「全力全開で上条君を」
「止めてみせるで！」
「・・・・・」
その場の空気が重くなる、そこに上条が一言
「…わかった・今回は諦める」
「「「！！」」」
「やったよ！フェイトちゃん、はやてちゃん！」
「「「ヤッタ～」」」
「あそこまで頑張ったのに、不幸だ…」
なのは達はハイタッチをしているが、上条はキッチリｏｒｚの形になっていた

「…と言ってもずっとタダで飲み食いされてもなぁ？」
「な、上条さんはそんなことしません！」
「でもあんだけ嘘をつく人やからな～」
「あれはお前らの事を思ってだなぁ――」
「ほんまかいな」
「そこまで言うなら、イイゼ！何でもやってやるよ！」
「その言葉を待っとったんや！」
「ハッ！しまったぁぁ」
ココで一言、上条は戦闘以外で学習しない！！
「――――――という訳で機動六課に配属された上条当麻です！皆よろしく！」
「いや、その回想は何なんだよ」

「上条さん的には、その事には触れないで欲しいです！ハイ」
ヴィータの質問に上条は遠い目をしながら答えた
…かくして上条は、めでたく機動六課の一員になった

エリオの迷い

「そういや上条君は部隊はどうするん？」
突然、はやてが上条に聞いてきた
「部隊？勝手に決めてくれてオッケーですよ」
「ということで上条君はこっちだね」
「いや上条君はこっちの部隊だよ」
「こっち」
「こっち！」
「…なぁ上条君？」
「ん？どうした？」
「星と雷、どっちがええ？」
上条を譲る気のない、なのはとフェイトを見て上条に質問する
「」ピク
「」ピク
「ん～雷かな」
「な、なんで～」
「雷には思い入れがあるからな」
上条が遠い目をした時、とある電撃少女がクシャミをしたとか、してないとか…
「そんな～」
「やった！上条君はうちの部隊だね！」
フェイトが喜びを体で表現するようにピョンピョン跳ねる
「そうなのか？」
「はい、よろしくお願いします」
「よろしくお願いします」
「よろしくな、エリオ、キャロ、フェイト」
「ここでは隊長なんだけど…まぁ良いか」
「あかん、ヴィータを除いたスターズ部隊、壊滅や！」

「」
「見事に真っ白に燃え尽きてるな…」
「そろそろ訓練始めようぜ皆！」ニコッ
「ヴィータちゃん遅い！」
「もう訓練はじまってますよ！」
「速くしましょう！」
「「「「立ち直り早ッ」」」」
「？」
これほどわかりやすい反応をしている上条……流石である

「上条さんは何をすれば良いんでせうか？」
「そういえば決めてなかったね」
「じゃあどうするんだ？」
「後で私たちの部屋に来てくれる？メニューを組むから」
「了解です…で今は？」
「そうだね…うちの部隊の練習に入ってみようか」
「わかった」

「じゃあそれぞれの特徴を教えてくれ」
「僕は中距離からの加速で接近戦に持ち込みます」
「私はフリードと一緒に遠距離で攻撃します」
エリオ、キャロの順で特徴を聞いた上条は顎に手を置き、考える
「…じゃあ一回俺とやってみるか、右手なしで」
「えっ、上条さんとですか？」
「ああ、戦ってみるのが一番早いからな」
「でも右手なしで二対一はキツクないですか？」
「でもバリアジャケットが破れても困るし…」
「僕は男だから大丈夫ですよ？」
「バカッお前は裸をキャロに見せたいのか？」

「うっ！そ、それは」
「困るだろ？…それにお前アイツ（キャロ）の事好きだろ？」
「な、それは！」／／／／
他人の気持ちを察するのは早いのに何で自分にもあてはめないんだろう？と、フェイトが思ったのは秘密である
「本当に好きならそいつの事は守らなくちゃいけないし、それに…」
「それに？」
「そいつを悲しませたらいけないんだ」
「？」
上条の頭に思い浮かぶのは一人のシスターの顔
「…もしも自分が怪我をしてそいつが悲しむようなら傷ついちゃいけないってことだ」
あの病院の一室、『今』の上条当麻が彼女に会った時に見た彼女の顔
「…でも僕が怪我をして悲しむ人なんて――――」
「たくさんいるさ、少なくとも機動六課のメンバーは悲しむぜ？」
「そうだよエリオ」
「フェイトさん…」
「だからさ、自分を否定するような事を言うなよ」
「…でも、でも僕は作られた生命なんですよ！？」
「！？」
フェイトが驚いた
上条は、そんな反応を気にもせずただ一言
「それが？」
「「！！！」」
「そんなの関係ないだろ？
いくらお前が作られた生命だからって俺が心配しちゃいけない事はないだろ？
それでもお前が自分の事を否定するような事を言うってんならまずはその幻想をぶち殺す！」
「「・・・・・・」」

「あ、あれ？何か間違ったこと言ったか、オレ？」
反応がない二人を見て少し心配になる上条
…先程までのシリアスな雰囲気が台無しである
「い、いえ」
「そうじゃなくてね…」
エリオとフェイトは驚いていた
たいがいこの事を話すと皆離れていったのに、彼はそうしなかった
その事実にひたすら驚いていた
だが、その彼は何かおかしい事を言ったかな？と首をかしげていた
「あの～上条さんは何か変なことを言ったんでせうか？」
「ううん、そんなんじゃないよ」
「ありがとうございます」
「別に大したことは言ってねぇよ、それより早くしようぜ」
「は、はい」
そういって二人は訓練所の方へ戻っていった
（ありがとう上条君…）
上条は何も気にしていない様子だったが、確実にエリオの心は救われた
二人が走っていく姿は、まるで仲の良い兄弟のようだった
フェイトはただその二人を見ていた

温もり

「…ごめんフェイト」
「い、いや、さっきのは私も悪かったし…」
「・・・・・」
「・・・・・」
なぜこのような気まずい雰囲気が流れているかというと…

今より少し前
（そういえば上条君が来るんだった…着替えておこうかな？）
そう、こんな事を考えてしまったのが全ての元凶である
（うん、これでいいかな？）
フェイトにはプライベートでは警戒心というのが無い
だから部屋の中では基本下着なのである
（上条君が来るまでに着ておこう）
そんなことを考えていると突然ドアが開く

「フェイト～おじゃまするぞ～」

上条の視線の先には下着姿のフェイトがいた
空気が止まってしまった空間で上条が一言
「ｏｈビューティフルボディ」
「キャァァァァ！！！！」ドゴンッ
「グハァ！」
フェイトはバルディッシュを上条に叩きつける
「ふ、不幸だ…」ガクッ

…という何とも情けない事があったのだ

「そ、そういえばさ！」
上条が気まずい雰囲気を変えるために話題を振ろうとする
（ヤバい！何を話そう？）
「な、なに？」
フェイトが返事をしたことによって上条はさらに焦り
「今日のエリオの話なんだけどさ―――ハッ」
今日、一日で最も気になったことが口からこぼれる
（チョイスを間違えた～！）

結果……雰囲気変わらず失敗
失敗というより、先程より空気が重くなり大失敗である
フェイトの口が重々しく開かれる
「……プロジェクトF．A．T．Eって知ってる？」
「いや、知らないけど」
「簡単に言うとねクローンを作る計画かな…」
「！？」
「エリオはね、モンディアル家って所で病死した息子のクローンなんだ」
「なぁ、もしかしてその計画の名前のフェイトって」
「うん、私の事だよ」
「そっか…」
「ひいちゃった？私って作り物なんだよ」
とても悲しげな風に笑うフェイト
「……ハァ～」コツン
「？」
上条は溜息を吐きながらフェイトの頭を小突く
やられた側のフェイトは、よくわからないっといった顔をしている

上条がフェイトの顔を見ながら一言。
「くだらねぇこと言ってんじゃねぇよ」
「なっ！」
流石のフェイトも、この一言には怒った
上条は、そんなフェイトを見つめ、更に一言
「だってそうだろ？お前はお前として過ごしてるんだよ」
「！」
「それに…」ギュウ
「！！」

上条は優しく、そして力強くフェイトを抱きしめる
「お前はこんなに暖かいんだ、このぬくもりは幻想じゃない
確かにここに存在しているんだ
それだけで十分じゃねぇか」

フェイトは思った
この人の言葉はどうしてこんなに優しくて重いんだろうか？っと
そう思うと自然とフェイトの目から綺麗な雫が落ちていく
「お、おい、どうしたんだよフェイト」パッ

上条はフェイトから離れ顔を窺がおうとすると突然ドアが開く
「今日はやけに張りきっとったなぁ、なのｈ――――！」
はやてが部屋に入ってきたのだ
「ん？どうしたの？はやてｔｙ――――！」
その後ろから、なのはもやってくる

二人の視線の先にはフェイトを泣かせている（ように見える）上条がいた
「上条君？どうしてフェイトちゃんを泣かせているの？」

「い、いや～これはですね～…」ダラダラ
上条から尋常ではない汗が流れる
「説明してや～上条君♪（怒）」
「ヒィイイ！フェ、フェイト説明してやってくれ！！」
「グスン…」
「何でそんなタイミング良いんですか！？あなたは！」
「上条君？ちょっとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆Ｓしようか？」
「なのはサン？お話しするのにデバイスは必要ないんじゃ…」
「スタァァライトォォ…」
「いぃ！？まさかの無視！？」
「ブレイカァァア！！」
（さようなら…俺の人生……）ドゴーン
二人が勘違いだと気が付くのは綺麗な死体ができた後だった

休息（前書き）

セリフの間に、間隔をとってみました！
おかしかったら言って下さい！！

休息

「ハァ～不幸だ」

「ごめんなぁ上条君」

「まさかそんな理由があるなんて知らなくって」

「というか何で上条君はフェイトちゃんと一緒におったんや？」

「ああ、それなら」

「私が呼んだんだよ、訓練のメニューを考える為に話を聞こうと思って…」

「なるほどね…」

「…で話って何の話をすればいいんだ？」

「上条君が苦手な相手とかかな…」

「物理的な攻撃手段を使ってくる相手かな」

「なんや、じゃあ拳銃とかダメなんや？」

「ああ、俺の右手は異能の力以外には反応しないからな…」

「でも、あの第三次世界大戦に行ってきたんだよね？」

「あれは、相手が魔術を使ってきたから勝てたんだよ」
「そもそも魔術って何なんや？魔法とも違うみたいやし…」
「残念ながら上条さんには説明できません！」フンス
「いや、自慢げにすることじゃないよね…」
胸を張る上条に対して、なのはが冷静に突っ込む
「フフフ…上条さんは？開き直る〝という業を身に着けたのですよ！」
「言ってて悲しくならへん？」
「…悲しいというより虚しいです、ハイ」
「…話がそれたね、上条君は弱点を補うために何かしてる？」
「全くしていません！」
「じゃあ、そういう場面ではどうしてきたの？」
「相手が一人なら殴り合い、三人以上なら…」
「三人以上なら？」
「逃げる！！」
「「「ハァァァ～」」」

「えぇ！？普通は逃げるだろ？」

「いやぁ～期待させとってソレはないわ～」

「…何かゴメンナサイ」

「これじゃあどんなメニューにすれば良いかわからないね」

「まっ、何でも良いさ…つう事で俺は部屋に戻るからな」
そういって上条は自室へ戻っていった

「正直に言うと上条君に訓練は必要ないかもね…」
「私もそう思うの…」
「うちもや」
三人は上条が出て行ったドアを見つめながらそう言った

翌日
「ふう～やっと訓練が終わった～」

「一撃も上条さんに当てれなかった…」

「まぁ気にするなよ」

「気にしますよ！二対一なのに一撃も当らないなんてショックです！」
上条は現在訓練としてスバル、ティアナの攻撃を全てかわすという訓練をしていた

「そう言うなよ…上条さんだって痛いのは嫌なんですから……ん？」
「どうかしましたか？」
「いや、なんか焦臭くないか？」
「そういえば…ってスバル！あんたのローラー！」
「うわ、やっば～！」
「オーバーヒートかな？」
「じゃあ後でシャリオに見てもらえよ」
「そうだね…ティアナのアンカーガンも厳しい？」
「正直騙し騙しで…」
「ハァ～なら別に俺に一撃入れれなくても良いだろ？」
「それとコレとは話が違います！」
「お前、何か俺の知り合いに似てるよ…」
「知り合い？」
「ああ、一言でいうとピカチュウだ」
「？」

「まぁこの話は良いや」

「そうだね。それは置いといて、皆訓練に慣れてきたし…新デバイス作っちゃおうか？」

「「「「新デバイス？」」」」

「それじゃあ皆シャワーをしたらロビーに集まろうか」

「ハイ」

「ん？あの車は…」

上条の目線の先には黒い車が一台上条たちの方へ向かって来ていたするとドアの窓があき乗っている人が見えた

「おお！フェイトにはやてか！かっけぇなその車！！」

「ありがと上条君、コレ地上での移動手段なんだ」

「ところで皆、訓練はどうや？」

「「「上条（さん）がヤバイ（です）ね！！」」」

「そうかなぁ？上条さんは普通でせうよ？」

「「「それはない！」」」

「皆が否定するなんて不幸だ…」

「それでフェイトちゃん達、どこかにお出かけ？」
「うん、ちょっと6番ポートまでね」
「教会本部でカリムと会談や、夕方には戻るよ」
「私は昼前には戻るから、みんなで一緒に食べよっか」
「「「はい」」」
「ほんならな！」

車を走らせながらフェイトが、はやてに話しかける
「カリム・グラシアさんか、私は会ったことないんだけどどんな人？」
「機動六課を立ち上げる時に実質的な部分をやってくれたんは、カリムなんよ」
「だから私は人材集めに集中できた」
「まぁイレギュラー（上条当麻）も降ってきたしね」
「その事もカリムに聞こうと思ってな」
「上条君の事を？」

「うん、上条君については不明な点が多いしな」
「本人が話そうとしないしね」
「そうやね、どうして話そうとせんのんやろ？」
「まだその話題は出さない方が良さそうだね」
「こっそり調べておくけどな」
「たのんだよ、はやて」

「久しぶりやカリム」
「ホント久しぶりね、まぁ座って」
「カリムには感謝しとるで」
「ありがと、そう言われるとお願いもしやすいかな」
「なんやぁ今日のカリムはお願いモードか？」
「…ちょっとコレを見てほしいの」ピッ
二人の目の前に画面が広がる
「コレは…新しいガジェット？」

「今発見されている1型以外に二種類、新しいのが発見されてるの」
「戦闘性能は、まだ不明だけどコレを見て」ピッ
「デカいね」
「ええ、3型は割と大型ね」
「本局にはまだ報告しとらんやろ？」
「うん、それよりも問題はコッチ」ピッ
「これは…レリックやね、でもまだ早いような」
「そうなの！だから直接会って話したかったの、コレをどうするべきか」
「失敗は許されないから…」ピッ
「心配あらへん、隊長やフォアード陣は勿論今回は頼もしい味方がおるから」
「はやて…ん？頼もしい味方？」
「うん、上条当麻って言うんやけどな、うちの隊長に勝ちそうになったんや！」
やや興奮気味に、はやてが言う
「そんなに凄い人なの！…でもそんなに凄い人ならどうして有名じゃないんだろ？」

「そうなんよ、本人もあまり話そうとせんし…」

「なるほどね、それで調べてほしいという訳ね」

「おお！今日のカリムは物わかりええなぁ」

「それじゃあいつもは物わかり悪いみたいじゃない…わかったわ調べといてあげる」

「やった！」

「それで上条当麻と言うのは、どんな人なの？」

「上条君はなぁ――――」

はやては若干、顔を赤く染めながら上条のことを語りだした

新デバイス！（前書き）

新年、明けましておめでとうございます！
これからも読んでいただけると幸いです！！

新デバイス！

自分の事が話されているとは全く思っていない上条はエリオと一緒にシャワーをしていた

「フンフンフッフン～♪」

「あっ、髪を下した上条さんもカッコいいですね！」

「ん？ああシャワーする時はいつもこうなるんだ」

「そうなんですか、いつもとギャップがあって僕は良いと思いますよ」

「ありがとエリオ…ゲッ」

「どうかしたんですか？」

「ワックスが無い…不幸だ」

「ドンマイです、今度買いに行けば良いですよ」

「そうだな…そろそろ出るか！」

「ハイ！」

「長いな…」

「…そうですね」

「こんなに待たせたら、なのはの奴キレたりしてな」

「それは困ります！」

「大丈夫だよ…大概そういうのは（不幸）俺に来るから」ボソッ

「？」

上条が何を言ったのか聞き取れなかったエリオは首をかしげている

「ゴメンね、二人と…も…」

「？どうしたのよスバ・ル」

二人の目線の先には髪を下した上条がいた

「やっぱり変か、この髪型？」

「「いや、スゴイ似合ってるよ上条さん！」」

「そう思ってるならコッチ向いて欲しいよ…」

現在二人は上条の顔をまともに見れてなかった、なぜなら…

（（ヤバい！髪を下した上条さんカッコ良すぎる！））

とか思っているからである

「？まぁ良いや、ロビーに行こうぜ」

そういう素振りに気づかないのか上条クオリティ

ロビーに着くと、なのははもう着いていた
「あ！やっと来たね、遅いよみん・な・・！」プイッ
「ワーオなのはまで顔をそらしてきたよ～」
「か、上条君！どうしたの髪！？」ドキドキ
「ワックスが切れたんだよ」
「そ、そう」
「どうしたなのは？顔が赤いぞ、風邪か？」
「ふぇ？ち、違うよ」
「そうか、調子が悪くなったら言えよ？お前だって一人の女なんだからさ」
「うん、心配してくれてありがとね」
「お互い様だ、じゃあ行くか」
「そうだね」
少し歩くと研究所らしき部屋があった
「ココか？」
「うん、入るよ」

「「「「「「おじゃまし ま～す」」」」」
ここに来ても予想通り皆上条から目を逸らす
（ああ～やっぱり？）
「これが新デバイスですか？」
「うん、そうだよ」
「へえ～カッケェな」
上条は皆のデバイスを見ながら言う
「あれ？でも俺が来る意味なくねぇか？」
「そんなことないよ」
なのはが上条の言葉を否定する
「何でだよ？」
「実はこっそり作っていたの」
「なっ、俺はいらないって」
「大丈夫だよ、うちの科学力で作ったものだから」
「それじゃあ右手で触れても！」
なのはの言葉を聞き、上条の顔がパァーと明るくなる
「もちろん平気だよ」

「ありがとう、なのは！」ギュッ
上条が嬉しさのあまり、なのはの手を握り締める
「ちょ、ちょっと上条君！」ドキドキ
「あ、悪い！嫌だよな…」パッ
「あっ…」シュン
「コホン…上条さん、そのデバイスについてですけど」
少ししおれたなのはの代わりに、シャリオがデバイスの説明を始める
「何だ？」
「バリアジャケットの機能は付けれませんでした」
「ああ、別に気にしてないよ」
「で、でもその他の機能は最高レベルにしておきました！」
「サンキュー…そういえばコイツの名前は？」
「それは上条さんが決めるんですよ」
「ん～じゃあ右手にちなんで『イマジン』で良いかな」
「後『イマジン』は上条さんが指示すると空気中の魔力…いわゆる『魔素』で足場を作れます！」
「へ～ じゃあ空を飛べるようになるのか…」

「どちらかというと、空を歩けるって感じですね」

「まぁどっちでもいいや、ありがとなシャリオ」

そう言いながら上条はリストバンド型のデバイス『イマジン』を右手に装着した

「よろしくな『イマジン』！」

『Ｙｅｓ，ＭｙＭａｓｔｅｒ』

「あのさ『イマジン』上条さんは英語が苦手なので出来れば日本語に…」

『了解しました、マスター』

「うん、後俺の事は当麻でいいから」

『わかりました、トウマ』

「それと上条さん達のデバイスにはリミッターがかかっています」

「「「「リミッター？」」」」

「うん、皆が今のデバイスを完璧に使いこなせるようになったら解除していくよ」

「へぇ～それがなのは達がしているリミッターってやつか…」

「私達本体にもかかってるけどね」
「やっぱり動きにくいとかあるのか？」
「ん～そんな事はないかな、でもそろそろ皆の相手は苦しくなってくるけどね」
「だってさ頑張れよ皆」
「上条君は頑張らないの？」
「上条さんは罪のない人には暴力は振りません！」
つまり頑張る気がない事を主張する上条

ピピイピイピイピピピイピイ
「このアラートは！」
「何だ？このうるさいのは」
なのはは反応するが上条は何が何だかわからない様子である
「コレは…」
「一級警戒態勢！」
「グリフィス君！」ピッ
なのはが焦ったようにモニターを出す
「ハイ！教会本部から出動要請です」ピッ
別のモニターにはやての顔が映し出される

「なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君こちらはやて！」
「状況は？」
「教会本部で追ってたレリックらしき物体が見つかった」
「対象は山郭リニアレールで移動中」
「移動中って…まさか！」
「そのまさかや、内部に侵入したガジェットのせいで車両の制御が奪われとる」
「リニヤレール内のガジェットは最低でも３０体！」
「３０体も・・！」
「いきなりハードな初出動や、なのはちゃん、フェイトちゃん行けるか？」
「いつでも！」
「フォアードの皆もオッケーか？」
「「「「ハイ！」」」」
「よし、良いお返事や…一名を除いて」
はやてが上条をジト目で見る

「ん？ああ、がんばるぞ～」

「コホン、なのはちゃん、フェイトちゃんは現場指揮！」

「了解！」

「ほんなら機動六課、出動！」

「「「「「ハイ」」」」」

リニアレールに航空戦で向かっていると、なのはがフォワードの皆に話しかける

「新デバイスでぶっつけ本番になったけど、訓練通りで大丈夫だからね」

「はい、頑張ります！」

「エリオもキャロもしっかりですよ」

「「ハイ！」

「さて、残す問題は…上条君！」

「は、ハイィィ何でございましょう？」

「何だかさっきから様子がおかしいよ？何かあったの？」

「聞いても怒りませんか？」

「怒らないから言ってみて？」
「レリックとガジェットって何？」
「「「「ハァァァ？」」」」
「ほら、こうなるじゃん！だから言いたくなかったんだよ！」
「まぁ、詳しい説明は後でしてあげるから
機械がガジェット、宝石みたいなのがレリックだよ」
「へぇ～でそのレリックってのを取ってくればいいんだな？」
「それとガジェットを壊してきて」
「…あれ？相手が機械なら上条さん危険じゃね？」
「「「「……」」」」
「どうせそんな事だと思ったよ、こんチクショウ！」
「…じゃあ危険になったら私たちを呼ぶこと」
「「「「はい」」」」
「思いっきりやってみよう！」
「「「「ハイ！」」」」

「フフッ今日の上条さんは少しばかりバイオレンスですよ」
不気味な笑いををしながら上条が少しおかしな発言をする

「……」
キャロは何か心配なのか、少し体が強張っている

「大丈夫だよ」
なのはが、そんなキャロを見て声をかける

「えっ」

「何かあれば私達がフォローするし、それに…」チラッ

「？」
なのはが上条の方をチラッと見る
上条はその視線に気づいたが、何故こちらを見ているのかわからないといった顔をしている

「バイオレンス上条さんもいるから」

「俺はそんなニックネームを求めてねー！」ウガー

「「「「ハハハハ」」」」

「クスッ」

「緊張はとけた？」

「あっ…」

「なのは、お前俺をネタにしやがったな！」
「…もうすぐ目的地だよ、気を引き締めて！」
「スルーされた！？」
「ところで、どうやって降りるんですか？」
「飛び降りる」
「「「「ええぇぇ」」」」」
「着地はガンバレ！」
「不幸だ・・・」
「じゃあ上条さんは年齢的に最後ですね」
「わかった」
「それじゃあ行くよ！」
「「「「「ハイ（オウ）！！」」」」」
「…さて最後は俺か」
「上条君、無茶しちゃダメだよ？帰ってきてね」

「誰に言ってんだよ…必ず戻る」

「じゃ、じゃあ終わったら一緒に出掛けようね／／／」

「ああ、別に良いぜ」

どうせ荷物持ちだろうな～、とか素で思うあたり流石である

「やった！」

「それでは、上条行っきまーす！」ヒョイ

「それはパクリじゃ…」

なのはが何か言っていたが、無視して飛び降りる

「ハッそういえば…」

『どうしました、マスター？』

「どうやって着地するんだ！？」

『考えてなかったんですか！マスターのバカァァアア！！！』

「ふ、不幸だぁぁあああ！！」

この時、デバイスにバカよばわりされるマスターがいたとかなんとか

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3344x/

とある魔道師と幻想殺し

2012年1月1日01時48分発行